

**北陸大豆サロン**  
**～知っておきたい麦豆事情～**  
**概要（質疑応答・意見交換）**

令和8年2月4日開催

北陸農政局  
生産部生産振興課

# 生産者に対する質疑応答

## 【生産者】 堺町生産組合 徳茂氏（新潟県長岡市）

- 圃場にはどのように給水しているか？  
→ 各圃場に給水栓があるため、栓を開けるだけでかん水できる。一方で、かん水が必要になる7～8月は水稲も栽培するため、水の競合が生じる。土地改良区と相談しながら、日中は水稲、夜間は大豆と入水時間を分けている。
- 液肥の施用時期は？窒素液肥の散布はどのような効果があるのか？  
→ 2回目の培土と同じタイミングで液肥を散布。液焼けの心配もあるため、比較的気温が低い夕方に散布するように注意している。液肥の施用を始めてから、収量が増加したほか、草丈も長くなったため、刈り取りの作業性が向上した。
- エンレイよりも里のほほえみを作付けしたいと考える理由は？  
→ 高収量であることが一番の理由。里のほほえみは草丈が長いので機械収穫が容易である。一方、葉焼け病に罹患しやすいので注意が必要。
- 地域全体で7年産大豆の小粒化が見られるとのことだが、要因は何と考えるか？  
→ 除草が行き届いていなかったことが要因と考えられる。

# 試験研究機関に対する質疑応答

## 【試験研究機関】 中日本農研 大野氏

- 9月の登熟期に高温に当たらないようにするための播種時期はいつが良いか？  
→ 一般的には6月上旬ごろが適期だが、各県が公表している指針も参考にさせていただきたい。ただし、北陸の場合は、播種を後ろ倒しにしすぎると収穫期に秋・冬季の降水に遭うことになる。気象条件だけでなく、ほ場条件も関連するため見極めは難しいが、5月下旬に播種した方が青立ちは少ない。
- そらシリーズは開発途上とのことだが、次の改良品種の発表の見通しは？  
→ 現在準備を進めているが、この1～2年で発表できるわけではない。
- 「そらひびき」の選別調製に通常より時間がかかるのはなぜか？  
→ 「そらひびき」が扁平粒であることが大きな理由。

# 意見交換

## (1) 実需者が求める大豆生産に関する産地への要望について

### 【実需者】北川製油株式会社 北川氏

- 富山県産大豆を使用する上で、産地側に要望することは？  
→近年は中～小粒の流通が多くなっている。一方で、見た目に優れた煮豆等の用途に向く大粒の流通は減少している。粒が小さいと選別も大変なため、大粒の供給をお願いしたい。

### 【全農】全農西日本麦類農産事務所 中澤氏

- 為替等により需給動向が変化している中で、今後の国産大豆の需給の見通しは？  
→円安の影響を受けて輸入大豆と国産大豆の価格差が縮小しており、国産大豆の需要を拡大する好機と考える。輸入大豆から国産大豆へ切り替えていく上では購入のタイミングが問題。輸入大豆は事前契約を結んでいるケースが多く、国産大豆への切り替えは翌年以降になる場合が多い。国産大豆の需要が根強いのは間違いないため、今後、ストックセンター等を活用し、翌年産以降も見据えた中長期的な保管体制を整備することで需要拡大に取り組むことが必要。

### 【実需者】互明商事株式会社 松川氏

- ストックセンターを建設したメリット、またそのメリットを生かすために産地側に期待していることは？  
→建設以降、在庫を放出したことはまだないが、今後、不作等の事態が発生した場合には在庫を放出することで供給を安定させ、国産大豆の需要維持が期待できる。一方で、ストックセンターは実需者の近くに建設したため、産地からは遠く輸送経費がかかる。国産大豆の需給安定のため、輸送経費の負担含め、産地と協力しながら円滑な備蓄に努めたい。

# 意見交換

## (2) 北陸地域における大豆の収量向上について

### 【生産者】 堺町生産組合 徳茂氏

- 培土、雑草防除のタイミングはどのように判断しているのか？  
→播種後30～40日後に1回目の培土を実施。1回目の培土と同時期にヒ工科・イネ科雑草に対する除草剤を散布。1回目の培土後、7～10日後に2回目の培土を実施し、同時期に広葉雑草に対する除草剤を散布。

### 【試験研究機関】 中日本農研 大野氏

- 夏場の作業について、大豆の収量確保・品質維持のために留意すべきことはあるか？  
→排水性向上のために畝立て播種が推奨される一方で、今夏のような干ばつ条件ではかん水が必要になる。状況に応じた対応は簡単ではないが、迅速に対応してほしい。また、気温や品種が変わるとカメムシの発生状況も変化するので、予察情報等を随時チェックしてほしい。

## (3) その他

- (全農にいがた) 「そらひびき」について、新潟県では7年産で4生産者が試験栽培を実施しており、中には360kg/10aほどの高単収の方もいる。一方で、選別時間が2倍かかることや、種子の確保が難しいといった課題がある。